

緒方春朔にみる伝染概念の考察

西巻 明彦

北里大学東洋医学総合研究所／日本歯科大学医の博物館

北里大学東洋医学総合研究所には、「緒方文書」が存在している。その内容は「戴曼公唇舌口訣」、「痘疹雑伝」など8種類14冊で2代目緒方春朔である文友が、天保8年、京の佐井家に入門した時の筆写本と江戸での痘瘡治療に対しての筆写本である。緒方文友は長命で、明治28年に92歳で没している。これらの文書は明治44年に文友の孫にあたる緒方駒雄の手で伝染病研究所に寄贈され、北里研究所が発足した時に移されて現在に至っていると考えられている。これらの文書は池田流の痘瘡治療の書で、文友がわざわざ京へ上り、佐井家の門をたたいたのは緒方流の人痘種痘法は、痘瘡治療と密接な関連があると考えられる。事実文友は秋月藩にもどっても祖父春朔の跡継ぎとして全国から門人を取り、春朔没後の「緒方家門人帳」には安政4年まで31名をかぞえる。

緒方春朔は『医宗金鑑』の中の種痘法について衣苗種法、漿苗種法、水苗種法、旱苗種法の中の苗種法を採用している。旱苗種法は痘痂を鼻腔に入れることから始まるが、このことについて春朔は『種痘必順弁』の中で、「苗を鼻中に投入すれば其氣先ず肺に伝ふ。鼻は肺の外竅にして相伝の官たり。故に一たび肺に入るものは必他の血臓に伝ふ。其理ひとり痘のみに非ず。時期諸般の疾皆鼻より入って病を成す。鼻は気の通路なり。故に天地間の氣に若干正の氣有れば人皆且つ氣を呼吸して邪をして内に引て病をなす。痘瘡流行の理も又これにひとし。」と述べている。このことから春朔は痘瘡が鼻腔を介して伝染していることを主張している。呉有性の『温疫論』(1642)は、温病について傷寒と異なり、口鼻からの伝染することを述べており、『温疫論』の和刻は1770年であるが、この理論に対して様々な見解が当時存在していた。畑黄山は『弁温疫論』(1800)の中で「未だ口鼻に従って入るを聞かず」と述べ、松尾淡台は『温疫反案』で「邪を受るの端、腠理九竅爪縫膺会、隙として受けずことなし。なんで、ひとり口鼻のみを言わんや。」と記している。これに対し萩野元凱は、『温疫余論』(1811)の中で、呉有性を絶賛している。つまり春朔の時代には口鼻からの伝染は確定的な事象ではなく、このことも種痘批判派の一つの反論点であったと考えられる。春朔はさらに『種痘必順弁』で「種痘ひとたび内に入りては五臓に伝送終に腎に至りて骨髓潜伏する処の痘毒を誘て出づ。…(中略)…苗氣肺受て次に心に伝ふ。心又之を腎に伝ふ。腎は骨を主る。痘毒骨髓に潜伏す。苗氣ここに至りて同氣相感して其毒を引出て」と記述している。肺から心、脾、肝、腎に至るのは五行説であり、痘毒が骨髓に潜伏するのは内毒説である。痘病による毒は外毒説で、両者が相感して、内毒がなくなれば二度と痘瘡に罹患しないという概念は、橋本伯寿の『断毒論』の一生一患の弁、萬病萬毒論と合い通じあうものがある。

痘瘡について、当時から順症と悪症に分類される傾向が当時強かった。春朔は「すべて治を未病に施す故に他症ともに病む患無し。天行の痘は其疫に感する時を期せず」とし、さらに「難治の痘なる類ひも多からん」と述べ、人痘法により順痘を人工的に起こし、最初の治療で痘瘡をやりすごすことを目的としている。このため『種痘必順弁』の中にも、二聖散、解毒剤、解熱剤などがみられ、この点が後の牛痘法と大きく異なる点と言える。